

とこなめ陶の森 陶芸研究所



常・設・展 やきもので辿る
常滑の歴史

中世



しぜんゆうおおがめ
自然釉大甕 (12 世紀中葉) (撮影：中野耕司)
高さ：45.7 cm 口径：33 cm



しぜんゆうさんじこ
自然釉三耳壺 (12 世紀中葉) (撮影：中野耕司)
高さ：39.5 cm 口径：21.3 cm



しぜんゆうおおがめ
自然釉大甕 (13 世紀中葉) (撮影：中野耕司)
高さ：57 cm 口径：34.8 cm



しぜんゆうさんきんこ
自然釉三筋壺 (12 世紀後半)
高さ：24.5 cm 口径：11.5 cm



たんけいこ
短頸壺 (12 世紀中葉)
高さ：29.1 cm 口径：14.1 cm



しぜんゆうつぼ
自然釉壺 (16 世紀前半)
高さ：38 cm 口径：16.5 cm



ヤマチャワン しょうわん
山茶碗 (左)・小碗 (右) (12世紀中葉)

(左) 高さ：5.8 cm 口径：16.6 cm

(右) 高さ：4 cm 口径：11 cm



カタクチバチ
片口鉢 (13世紀)

高さ：19.5 cm 口径：32.7 cm



ノミヒらがわら
軒平瓦 (12世紀後半)

高さ：5 cm 幅：20 cm



とうがん
陶丸 (13世紀)

幅：2 cm



とうげん
陶硯 (12～13世紀)

縦：9.8 cm 横：5.8 cm 高さ：2.1 cm



さい
賽 (12～13世紀)

幅：2.5 cm

近世



とこなめげんこうさい まやけみずさし
常滑元功斎作 真焼水指 (江戸時代後期)
高さ：15.6 cm 口径：15.4 cm



あかいとうぜん へにばちがたつちぶろ
初代赤井陶然作 紅鉢型土風炉 (江戸時代後期)
高さ：17.4 cm 口径：33.9 cm



かみむらしくはこう がませんじんぞう
上村白鷗作 蝦蟇仙人像 (江戸時代後期)
高さ：20.4 cm 幅：15.5 cm



かみむらしんきち そうがたこうろ
上村信吉作 象形香炉 (江戸時代後期)
高さ：15.5 cm 幅：36.5 cm



い なちようざ ししまみゆわかし
二代伊奈長三作 獅子摘湯沸 (江戸時代後期～末期)
高さ：12 cm 幅：18.6 cm



い なちようざ けんがいばち
四代伊奈長三作 懸崖鉢 (江戸時代末期～明治時代初期)
高さ：18 cm 口径：25.4 cm



はくち きんらんで かびん
白地金欄手花瓶 (明治時代)

(左) 高さ : 38 cm 口径 : 15.5 cm
(右) 高さ : 37.8 cm 口径 : 15.5 cm



しゅでいつるくびりゅうまさかびん
朱泥鶴首龍巻花瓶 (明治時代後期)

高さ : 25.2 cm 口径 : 2.4 cm



とうたいしつ きかちょうえかびん
陶胎漆器花鳥絵花瓶 (明治時代末期~大正時代)

高さ : 31.7 cm 幅 : 11.9 cm



ロッキングラム・ティーポット (昭和時代前半)

(左) 高さ : 12 cm 幅 : 17.8 cm
(右) 高さ : 11.7 cm 幅 : 20 cm



まねねこ
招き猫 (昭和時代後半)

(中央) 高さ : 29.6 cm 幅 : 21 cm



すぎえおうげん えとおきもの
初代杉江滂軒作 干支置物 (子) (昭和時代後半)

高さ : 25.7 cm 幅 : 24.7 cm

近・現代



すぎえ じゅもん 初代杉江寿門作
はくでいしろうできゆうす かくめいし 白泥後手急須「雀鳴子」(明治時代前半)

高さ：7 cm 幅：11.1 cm



やま だじょうざん 初代山田常山作
はくでいしみがきろうできゆうす 白泥石磨後手急須 (大正時代)

高さ：5.5 cm 幅：11.8 cm



いそむら ぱくさい 初代磯村白斎作
はくでい も がけよこ で きゆうす 白泥藻掛横手急須 (明治時代～大正時代)

高さ：6.3 cm 幅：7.4 cm



やま だじょうざん 三代山田常山作
り ひ しでいちゃちゆう 梨波紫泥茶注 (平成時代)

高さ：5.7 cm 幅：9 cm



こ にしろうへい 小西洋平作
も がけ ちゃちゆう 藻掛茶注 (平成時代)

高さ：6.4 cm 幅：11.8 cm



ざわだ しょうぞん 二代沢田昭邨作
ま やけ きゆうす 真焼急須 (平成時代) (個人蔵)

高さ：8 cm 幅：11 cm



ヤマダケンキチ コホキチャワン
山田健吉作 粉吹茶碗 (平成時代)
高さ：7.2 cm 口径：13.1 cm



ヒサダシゲヨシ ヨウヘンテンモクチャワン
久田重義作 耀変天目茶碗 (平成時代)
高さ：6.4 cm 口径：11.9 cm



サワダシゲオ ケシヨウガケコウサイチャワン
沢田重雄作 化粧掛紅彩茶碗 (平成時代) (個人蔵)
高さ：8.2 cm 口径：10.7 cm



タニカワシヨウゾウ ハマグリカイキウチャワン
谷川省三作 蛤貝釉茶碗 (平成時代)
高さ：6.9 cm 口径：13.6 cm



コイエイリョウジ シタラデチャワン
鯉江良二作 設楽手茶碗 (平成時代) (個人蔵)
高さ：8.6 cm 口径：14.7 cm



ヨシカワマサミチ クロチャワン
吉川正道作 黒オリベ茶碗 (平成時代) (個人蔵)
高さ：10 cm 口径：13 cm

中世

常滑焼は、900年を超える長い歴史があります。そのルーツは、名古屋市東部から豊田市西部付近にみられる猿投窯西南麓古窯跡群（通称猿投窯）にあります。12世紀の初頭、知多半島にロクロの技術が伝わり、山茶碗や片口鉢の生産が開始されます。それからまもなく、知多半島の中央部辺りで、ひもづくりの技法による大きな甕の生産が始まります。その後、鎌倉時代後半には壺や甕の大型製品に特化した窯業地へと発展していきます。その背景には大物の生産に適した陶土、やきものを焼成する窯の構築に適した丘陵地、三方が海に面する海運に適した立地などが挙げられます。そして北は東北地方の奥州平泉、関東地方では鎌倉、西は九州地方の太宰府など、常滑窯で生産されたやきものが全国各地で大量に発見されています。

近世

常滑窯は、中世の伝統を引き継ぎ、壺や甕などの大型貯蔵器の生産が続けられていきます。そのような中で18世紀後半に入ると抹茶器や煎茶器などの新しいやきものの生産が始まります。渡辺弥平衛は紐づくりの技術を活かして、茶道具である水指、花生、香合などをつくりました。その技術は大変高く、当時の尾張藩藩主から常滑元功斎の銘を賜り、常滑の名工時代が始まります。煎茶器を代表する急須は、江戸時代後期からつくられるようになります。最初の急須は壺や甕と同じように赤褐色の地肌のやきものでしたが、土の研究が進められて、白泥土や南蛮土、朱泥土など多様な土が使われるようになります。江戸時代に好評を博したのは常滑の白泥土で、二代伊奈長三が発見したといわれています。二代長三は、白泥土に海藻を巻いて焼き上げた火色焼（現在は藻掛焼）を創始したといわれ、常滑ならではの装飾として今も人気があります。

近・現代

常滑は近代に入ると、貿易陶器や土管、テラコッタなどの建築陶器の生産も盛んになります。貿易陶器は、龍をかたどった朱泥龍巻、花瓶に漆をつけて花鳥を描いた陶胎漆器、栗色の釉薬に色絵を装飾したロッキンガムウェアなど海外での流行に合わせて様々なやきものが考案されました。

また、明治時代後半以降、やきものによる彫塑「陶彫」も盛んになります。常滑美術研究所で教鞭をとった内藤陽三、寺内信一らは常滑のつくり手に西洋彫刻の技術を伝えました。その技術は建築物の外装に用いられたテラコッタや、市内の寺社などにある大きな陶像で知ることができます。戦後はノベルティや干支、招き猫などつくられるやきものを変えながらその技術が息づいています。

急須は、昭和30年代以降、常滑を代表するやきものになり、故三代山田常山は国の重要無形文化財の保持者として認定されました。近年は朱泥急須に限らず、釉薬を使った彩のあるものや紅茶用のティーポットなど様々なものがつくられています。